

## 勃発した耳垢事件

メールの内容は、次のようなものでした。「母が来てから1か月が過ぎました。“小ボケ”と思っていた母が、“大ボケ”だったことに日々気づかされています。1人で、どんな暮らしをしていたのか？

補聴器が機能してくれて、対面での会話はスムーズになりました。その分、余計な話にもなり、『頭が相当イカれてきた、娘に迷惑をかけて、申しわけない』と話しては、1日1回以上は泣いています」

一緒にいないと分からないことが、同居後、分かってきたのでしょうか。

その場をうまく、言葉でかわされてしまうので、何時間が一緒にいたくらいでは分からないことだらけだったのです。

そこで、見聞きした高齢者の行動の体験談を教えてあげました。

例えば、テレビの音量を最大にしていたのに、ある日、突然聞こえるようになったらしく、音量を上げなくなった事例。

大きな耳垢が寝ている間にとれたんだらうと、周囲は思っていました。

それから半年ほど経ってまた、突然大音量に。そのときはさすがに、「耳鼻科で耳垢をとってもらわないと」と、受診。

すると、信じられない大きさの耳垢がとれ、音量事件はなくなったとか。

こうしたことも、一緒にいないと分からない出来ごとですね。

## 至れり尽くせりの結果…

短期記憶がさっぱりダメで、先ほどのんだ、夜のおクスリの件も覚えていない



高齢の親がいる同級生が、メールをくれました。切実な内容だけに、いくつかの事例を伝えたのです。

近くでじっくり観察して見落とすこと、見落としてしまうケース、介護をした人にしか語れないことがある



事例もあります。

対策として、薬袋に、日づけとラインを入れておき、のんだら時間を記入、『おクスリをのんだ箱』に入れてもらうようにしているのです。

「お母さん、おクスリをのんでないっていついたけれど、ちゃんと時間も書いて、この箱に入れてあるよ」と、見せて納得させないとダメなケースです。

ちなみに、翌朝のおクスリを、寝る前に揃えておくと、夜中にのまれる可能性があるので危険なため、隠しておきます。

ちなみに、デイサービスやショートステイは、至れり尽くせりのサービスです。

転倒されたら大変なので、動こうとするとすぐに近寄り、手を添えます。職員が、床に落ちたものを拾ってくれたり、こぼしたらサッと拭いてくれたりも。

こうしたことにすっかり慣れてしまうので、家へ帰ってきたら、自分で何もしなくなります。

近くでじっくり観察していないと、見落としてしまいそうなことは、他にもたくさんありそうです。高齢者の介護をした人にしか、この体験談は語れないと、あらためて感じ入りました。

宮川薬局(宮城県仙台市)代表  
薬学博士・薬剤師  
みやがわとしじ

宮川季士先生

プロフィール

1976(昭和51)年、東北薬科大学(現・東北医科薬科大学)卒業。'78(同53)年、同大学大学院修士課程修了。'87(同62)年、薬学博士学位。地域に根ざしたおクスリ屋さんとして、多くのファンが。「今年も後わずか。元気でいきましょう」

